豚の腹腔内腫瘤

（全食協病理部会第46回研修会・演題No1783発表者：松田　克也）

豚（雑種）、雌、約2歳

生体所見　健康畜として搬入された。やや削痩していた。

内臓所見　腫瘤(37×26×24cm)は左腎部に位置し、表面は灰白色の厚い被膜に覆われ硬結感があった。割面は中心部に高度の出血、壊死を認め、周辺部は乳白色から赤褐色で充実し、不規則分胞状を呈しており、腎臓の固有構造は認めなかった。副腎は圧迫され腫瘤に付着していた。

肺及び肝臓では全葉にわたり直径 1～3 cmの乳白色で硬結感のある隆起した結節が密発していた。結節の割面は充実し、不規則分胞状を呈しており、周囲との境界は明瞭であった。

脾臓では肺及び肝臓と同様の結節が背側端辺縁部と実質内に各一ヶ所認めた。

組織所見　腫瘤部では腫瘍細胞が、び漫性に増殖し、豊富な結合織により不規則に区画されていた。腫瘍細胞は細胞質に乏しく、大型の類円形から多形性の核を有し、細胞の境界が不明瞭であった。一部の腫瘍組織内には一層から数層に並ぶ上皮様の腫瘍細胞からなる管腔構造を認めた。管腔構造を形成する腫瘍細胞は比較的豊富な細胞質を持ち、大型の円形から類円形の核を有していた。いずれの腫瘍細胞にも核分裂像を高頻度に認めた。

肺、肝臓及び脾臓の結節部には、腫瘤と同様の腫瘍細胞が、び漫性に浸潤増殖し、一部に管腔構造を認めた。また肝臓では小葉間血管内に腫瘍細胞の集簇を認めた。

診断名　多臓器転移を伴う悪性腎芽型腎芽腫

まとめ　肉眼所見および組織所見より多臓器転移を伴う悪性腎芽型腎芽腫と診断し、全部廃棄処分とした。